

目的 第5・6報において、薄着の効用を皮膚温特性およびかぜり患率の面から明らかにした。一方、第4報の結果をふまえ、薄着の指導によって着衣態度、スポーツ習慣などの個人要因に関するプロフィールを修正し、薄着の実践が可能であろうと推論した。本報では、その推論を薄着奨励校における学童の成果に基づいて実証しようとした。

方法 対象者は、薄着奨励小学校（G校）および非奨励小学校（N校）の学童（5・6年生）で、同一人について秋と冬に調査を行った。有効サンプル数は、G校学童：4校から抽出した630名、N校学童：6校からの877名である。おもな調査項目は、①標準化着衣量（SDC）（第3報）、②着衣態度、衣服の快適因子、スポーツ習慣などの個人要因、③冬期のかぜひき回数および病欠日数、④教室内の気温および温冷感などである。

結果 1) G校学童のSDCは、秋・冬ともにN校学童のそれより低かった。2) 冬期、かぜをひかなかった者のG校における率は47%で、N校の35%に比べ高率であった。3) 冬期、病欠なしの者のG校における率は61%で、N校の47%に比べ高率であった。4) 冬期の調査日、からだの不調の訴えがみられなかった者のG校における率は50%で、N校の30%より高率であった。5) G校学童の個人要因（着衣態度、スポーツ習慣など）に関するプロフィールは、第4報において明らかにした習慣的に薄着を行っている者のそれと、N校学童では厚着をしている者のそれと類似したものであった。以上の成績は、学童に対する薄着の指導によってもたらされた成果を示すものと考える。（3・4報は本学会年次大会（1983）、5報は同（1984）、6報は関西支部研究発表会（1984）の要旨集参照）